



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

サウジアラビア：映画館開設に関する議論

(24日付サウジ・ガゼット紙)

24日付サウジ・ガゼット紙は、「サウジアラビアでも映画館を開設する時だ」と題する記事を掲載している。

1. サウジアラビア社会は、国際的に存在感はあるものの、その文化や伝統を守りつつオープンな社会に向かいつつある。若い世代が直面する幾多の社会問題について賛否両論が高まっているが、映画館開設に向けた法整備もそのうちの一つである。
2. 現在の情報化社会において映画は簡単に入手できることから、映画館の禁止は意味がないとの意見がある中、希望者は近隣諸国のみでしか映画を鑑賞できない。今や、サウジアラビアでの映画館開設禁止令を見直し、一定の行動規範や罰則規定を設けた上で、全国のショッピング・モール内に映画館を開設するよう動き出すべきである。規制機関は映画の上映前に、上映できない内容が含まれていないか検閲を行い、サウジアラビアのルールに則った映画だけ上映すればよい。
3. キング・アブドゥルアジーズ大学にて国際メディアの専任教員であったアブドゥルラック・ウスマーニー博士は「ジッダには“裏庭の映画館”と呼ばれた映画館があったが、それらは草の根レベルであって大っぴらなものではなかった。サウジではラジオやテレビすら宗教保守派から批判されており、1950年代から1960年代にようやく全土に普及していった」「情報化社会は、映画館がもはやサウジアラビアの文化や伝統的な生活に対して脅威となることはない」と述べた。
4. イマーム・ムハンマド・ビン・サウード大学にて社会精神医学の専任教員を務めるアブドゥッラー・スバイヒ博士は「映画館は映画を通して価値や原則を提示するショー・ウィンドウであるが故に、サウジアラビア文化の正反対の位置にあった。それ故、サウジアラビア社会は、自己のアイデンティティと文化を守るため映画に反対した。映画館がきちんとしたコンテンツを有していないのに比べ、インターネットやテレビはこうしたコンテンツを有しているため、映画館開設に向けた議論が弱められている」と述べた。
5. キング・アブドゥルアジーズ大学のコミュニケーション技術の専門家であるサウード・サーリフ・カーティブ博士は「社会の変革をもたらすとして映画館開設に反対している人は少数派である。彼らは女性の雇用や教育に悪影響が及ぶことを懸念している。映画が有するコンテンツは今や誰でも入手できることから、正しく規制される限り、映画館開設に何の問題もない。しかし、粗野な行動を規制するための法律は必要である。映画鑑賞は楽しい体験であり、その体験の享受は全サウジ人の権利である」と述べた。